

## 巻頭言 「形成のとき」

宇野 元

千葉県佐倉市に、「ローズガーデン・アルバ」というばら園がありました。移転したため、写真で見ることができるだけの幻のばら園になりましたが、それは小さいながら、故鈴木省三の遺志を受け継いで、お弟子さんたちが情熱を注いだ本格的なばら園でした。1月になると誘因と剪定の講習会がひらかれ、何度か通いました。寒い午前、暖房のないガーデンシェッドの中で講師のお話を聞き、それから実習がはじまります。

「みなさん、『頂芽優勢』という言葉を知っていますか？ 枝の先の芽が、ほかの芽に優先して大きくなることをいいます。だから、つるバラは枝をアーチ状に広げます。そうすれば花がたくさん咲いてくれるでしょう。上に伸ばすだけだと、株の下の方がさびしくなります。……」

剪定のコツは、まず、よく眺めること。「どこを切ればいいか、ばら自身が教えてくれます。」鈴木先生は、椅子に座って、モーツァルトを聴きながら、眺めていたといいます。枯れたような姿の株から、やがて芽が出、葉が展開して、美しい花がひらくのを。

私たちは神の庭の植物として、時とともにふさわしく成長するよう配慮されています。冬の寒い季節です。裸の街路樹。乾燥した、硬い土。たとえ私たちが、今自分はそのようだと思うことがあっても。また世界が、私たちの目に、そんなふうに映ることがあっても。凍った湖。冷たい川。厳しい状況の中にも命が隠れています。父なる神の憐れみが込められています。

私たちは花ひらくことへ向かって歩んでいます。「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りない」とわたしは思います。被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます」(ローマ 8, 18.19)。各人が特色ある子どもとして現れるのを。思慮深い庭師の手により、各人にふさわしい形と色彩が備えられ、豊かな香りを放つ者とされるのを。

言い換えれば、今の歩みに重要な意味が与えられています。模索や回り道や足踏みがあります。しかしその一步一步に、恵みが伴っています。